HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	台湾における宗教性とボランティア活動 ： 台湾社会変遷基本調査の分析
Author(s)	寺沢, 重法
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 146, 295(左)-317(左)
Issue Date	2015-07-24
DOI	https://doi.org/10.14943/bgsl.146.l295
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59565
Type	departmental bulletin paper
File Information	146_05_terazawa.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 146 (2015)

台湾における宗教性とボランティア活動
── 台湾社会変遷基本調査の分析 ──

寺 沢 重 法

1 問題設定

本稿の課題は「現代台湾において，多面的な宗教性とボランティア活動の関連性はどのようなものなのか」という問いに答えることである。

宗教性とボランティア活動の関連は，特に欧米の宗教社会学や福祉社会学において盛んに論じられる重要な研究トピックの１つである。特にパットナムの *Bowling Alone* において宗教がボランティア活動の重要な規定要因と指摘されていることもあり，近年は様々な計量社会学的研究によって，教会内ネットワークや教会を通じて提供される各種情報がボランティア活動を促すという宗教のソーシャル・キャピタルとしての機能が着目されている（寺沢 2012b：48)。

この研究テーマは現在２つの方向に展開している。１つは多面的宗教性とボランティア活動の関連への着目である。先行研究の多くは教団所属や教会参加によって教団・教会内ネットワークを通じてボランティア活動へ参加するという局面に着目してきた。だが近年は，聖書を読む，祈りを行うなどの多様な宗教性がボランティア活動と正の関係にあることを示す知見も出されている。

もう１つは東アジアの宗教性とボランティア活動の関連の研究である。たとえば日本はキリスト教人口が１％程度であり，また教団所属や参拝といった組織性を前提とした宗教性よりも，組織性を前提としない「拡散的宗教性」

10.14943/bgsl.146.l295

(三谷 2014：5)[1] の方がむしろ一般的である。日本は欧米のキリスト教社会と異なる点が多く，今後の重要な研究対象として位置づけられる。そして近年は日本でも，宗教的要因がボランティア活動に関連することが全国データの計量分析から確認されている。たとえば宗教団体の所属者，宗教施設に定期的に行く人がボランティア活動を行う傾向にある（Sakurai and Terazawa 2012；寺沢 2012a)。しかし，「拡散的宗教性」については，信仰はないが家の宗教は仏教であるであると認識している回答者がボランティア活動に参加する傾向にあると報告されているのみだった（寺沢 2013)。そうした限界を突破する形で三谷は日本人の多面的な宗教性を測定してボランティア活動との関連を計量的に検討し，日本において「仏壇・神棚前での祈り」などの宗教性の高い人がボランティア活動を行う傾向にあることを明らかにした(三谷 2014)。

本稿は，三谷の研究（三谷 2014）を受け，現代台湾における多面的な宗教性[2] とボランティア活動の関係を計量的に検討する。この課題には次のような意義がある。第 1 に日本の知見の位置づけの明確化および分析対象の東アジア地域への拡大である。具体的には三谷による日本の知見の特徴を浮き彫りにするには日本と宗教状況が似た他地域との比較研究が必要である（三谷 2014)[3]。また三谷の研究（三谷 2014）を除き，東アジアを対象とした多面的な宗教性とボランティア活動の関連の計量研究は管見の限り行われていない(寺沢 2012b：15)。様々な東アジア地域を対象に，拡散的宗教性を中心とする多面的宗教性とボランティア活動の関連を検討することは，先述した研究の潮流と照らし合わせても意義がある。

その意味で台湾は重要な地域である。台湾は，日本と同様，キリスト教人口が少なく(約 5 %)，「拡散的宗教」（仏教や道教がベース）が主流である(瞿 1999：7-11)。また戦後台湾では公的福祉の不足を，宗教に基づく伝統的互助機能や利他主義が補ってきたと言われていわれる（丁 1999)。そして近年の台湾では豊富な宗教関連設問を含む社会調査データが蓄積され計量分析が可能である（章・傅編 2005：195)。

第 2 に台湾における宗教性とボランティア活動の関係の実証研究は，教団

対象の事例研究が中心だった。詳細は後述するが，たとえば慈済会を中心とした四大仏教（Hsiao and Schak 2005；Madsen 2007；丁 1999），キリスト教（藤野 2008），一貫道（Lu 2008）などの事例研究を通じて各教団の福祉・文化・政治活動などが検討されてきた。確かにこれらの教団信者のボランティア活動のインパクトは大きい。しかし教団所属以外の宗教性との関連はほとんど検討されていない。またこれらの教団の所属者は 3％～20％以下であり（章・傅編 2005），教団に所属しない回答者における宗教性，教団に所属するしないという点も含めた多面的な宗教性を検討する必要があり，そうすることによって教団とボランティア活動の関係の位置づけもより明確になるだろう。Tao and Yeh は「台湾社会変遷基本調査」を用いて宗教性とボランティア活動の分析を行っている（Tao and Yeh 2007）。しかし民間信仰に比べてキリスト教や仏教のボランティア活動頻度が高い，といった宗教の違いの比較分析であり，宗教性の捉え方はシンプルである。

第 3 に宗教社会学の方法論的意義である。台湾では豊富な宗教調査データが蓄積されているが，その豊富さに比して計量社会学的な宗教研究はまだ少ない（Zhai and Woodbery 2011: 309）。日本でも宗教を計量的に捉える実証研究が少ないことを考えると（三谷 2014：15），本稿は台湾のみならず東アジアの宗教の計量研究の蓄積にも寄与する。

本稿の構成は以下の通りである。まず第 2 節で台湾の宗教性を整理し，枠組みおよびどのような宗教性を取り上げるのかを先行研究を踏まえながら提示する。第 3 節ではデータと変数，分析方法を説明した上で，第 4 節で分析結果を提示する。第 5 節で要約と議論を行う。

2　分析枠組み

台湾における多面的宗教性とボランティア活動の関連を分析する際には，台湾における宗教性をどのように整理するかが重要な課題である。三谷は日本人の多面的な宗教性とボランティア活動の関係を分析するに当たり，宗教を多元的なものとみなしてその構造を捉える研究の嚆矢である Stark and

Glock の研究（Stark and Glock 1968）や近年の同様の研究である Van Tienen et al. の研究（Van Tienen et al. 2011）を参照しつつ表 1 の宗教性の類型を作成した（三谷 2014）。以下，この類型に説明を加えるとともに各宗教性とボランティア活動の関係について先行知見を整理する。

「集合的宗教性」の「公的実践の次元」とは，上述した通り，教団に所属する，礼拝に出席するなど宗教集団とボランティア活動との関わりを捉えたものである。近年は国際比較調査からも教会参加頻度の高さとボランティア参加の高さが指摘されている（寺沢 2012b：13）。日本でも伝統仏教の信者で宗教団体に所属する人はボランタリー組織に所属し（寺沢 2013），宗教施設に定期的に訪れる層ほどボランタリー組織に参加したりボランティア活動を行う傾向がある（寺沢 2012a）。ただし宗教施設を訪れることについては，非教団所属者サンプルにおいてはボランティア活動と有意な関連が確認できない（三谷 2014）。非教団所属者において寺社・教会は人々のソーシャル・キャピタルを形成する場ではなく「私的な祈りや加護観念といった社会的態度を形成する文化資本として機能することで，市民社会の構築のために重要な役割を果たしている可能性」（三谷 2014：14）がある。

「拡散的宗教性」の「私的実践の次元」は日常的な祈りや聖書を読む行為である。たとえば祈りは他人の困難を減らすために行われる傾向があり，こうした共感性がボランティア活動を促す。アメリカとカナダの研究では，教会

表 1　本稿で用いる宗教性の類型

大分類	下位分類	詳細	日本における指標
集合的宗教性	公的実践の次元	教団への参加，礼拝への出席など	①教団所属②参拝頻度
拡散的宗教性	私的実践の次元	日常的な祈り，聖書を読む行為など	仏壇・神棚前での祈り
	信念・経験の次元	狭義的信念，行動指針の重要性，救済の感覚など	①加護観念②霊魂観念
	結果の次元	上記の宗教性が個人の日常生活に与える影響	信心の自己評定

注：（三谷 2014：5-10）より筆者が作成

出席や教団所属を統制しても祈りの頻度の高さがボランタリー組織所属傾向に影響を与えると指摘される（Loveland et al. 2005）。日本では仏壇や神棚の前で祈ることが，ボランティア活動を促し（非教団所属者と日本人全体の両方），これは祈りを通じて他者の幸せを願うこと，他者への配慮の志向性が高まり，そのためボランティア志向性も高まるためであると指摘される（三谷 2014）。

「拡散的宗教性」の「信念•経験の次元」については，たとえば神の存在を信じる人は，教会出席や教団所属の効果を統制しても寄付をする傾向があることが指摘されている（Reitsma et al. 2006）。日本では「加護観念」（軽い宗教との結びつきへの親しみ，仏神の加護や報恩感謝，オカゲさまという恩情観念）がボランティア活動を促すという結果が得られている（非教団所属者と日本人全体の両方）（三谷 2014）。理由としては「神仏に対するおかげ様という感覚が人を謙虚にし，自分の命と同様に他者の命も尊重させるため，ボランティア活動への参加が促されている」（三谷 2014：13）と解釈している。一方「霊魂観念」（霊的存在，死後の世界，輪廻転生，タタリなどを信じること）には有意な結果は見られなかった（三谷 2014）

「拡散的宗教性」の「結果の次元」については，信仰が自分の人生や生活にとって意義をもつと考える人は，宗教的実践や信念などを統制しても，有意に寄付をする傾向がある（Reitsma et al. 2006）。一方，日本では「あなた自身には信仰心や信心がありますか」という設問に対する回答（5 件法）はボランティア活動と有意な関連を示さなかった（三谷 2014）。

なお「拡散的宗教性」には 3 つの下位概念が設定されているのに対して「集合的宗教性」には下位概念が設定されていない。理由としては，まず台湾，日本ともに後者に関する分析に関心が向けられる一方，前者の詳細については十分論じられてこなかった。また本稿のデータでは前者に関する設問，本稿の分析で使用する変数以外に含まれておらず，後者ほどに詳細な下位概念を設定することが難しいことがあげられる。

それでは以上の宗教性それぞれに対して，台湾では具体的にどのようなものを取り上げるべきだろうか。

公的実践の次元として第1に教団所属を取り上げる。3つある。第1にキリスト教である。台湾では17世紀のオランダ統治時代にキリスト教宣教が開始し，特に長老派が多くの信徒を獲得した。現在も台湾最大の教派は台湾基督長老教会である。他地域のキリスト教と同様，洗礼を受けた信者同士の結びつきは強く，多くの福祉・医療・教育事業にも積極的である。特に台湾基督長老教会は台湾独立運動などの政治参加が特徴的である（藤野 2008）。

第2に一貫道である。一貫道は1940年代後半に中国大陸で路中一によって創設された儒仏道合一の新宗教である。主として中華人民共和国設立とともに台湾に移動した。諸派に分かれているため一貫道という1つの組織があるわけではないが活動は似ている。「得道式」などの名称の入門儀礼によって信者（道親）となり，勉強会などの様々な会合に参加する。道親は菜食主義を行い，台湾各地には道親が経営する菜食レストランがある。このように一貫道はメンバーの結びつきが相対的に強固である。また一貫道には「助けを必要とする人に手を差し伸べる」「被災者を救う」など利他主義もみられる（Lu 2008）。

第3に四大仏教とまとめて称される慈済会（創設者：釈証厳，創設年：1966年，本部：花蓮県），仏光山（創設者：星雲，本部：1967年，本部：高雄市），中台禅寺（創設者：惟覚，本部：1987年，本部：南投県），法鼓山（創設者：釈聖厳，創設年1971年，本部：新北市金山区）という4つの大規模仏教教団である。各教団の中核は僧侶が担うが信者の自発的な活動の役割が大きく，各教団ともに信者数は数百万人とも言われ，複数の海外支部をもつ。また，テレビやインターネットなどの現代的メディアを用い化活動も行い，各種社会事業（福祉，医療，教育，文化など）にも精力的である（Hsiao and Schak 2005；Madsen 2007）。特に慈済会はボランティア団体として有名で，1999年の台湾大震災では多くの災害復興ボランティアを動員したとされる（丁 1999）。

以上の教団以外に，寺廟(4)や教会を訪れる・参拝することも，台湾における宗教の公的実践として取り上げる。

台湾における私的実践を1つだけ挙げるのは困難である。むしろ台湾にお

いては諸神格への祈り，祖先崇拝，念仏，座禅，読経，気功など多様な私的実践が行われている（Liu et al. 2011: 5）。祖先崇拝のように慣習的（年中行事など）なものもあれば，気功や座禅のように比較的明確な目的（精神的鍛練など）のもとで慣習とはある程度，別に行われるものもある。

台湾における信念・経験とは何かということは必ずしも明確ではない。ここでは信念・経験を宗教的態度・観念全般を指すものとみなし，台湾における宗教的態度・観念を論じた瞿海源の研究を参考にする。瞿は「台湾社会変遷基本調査」における宗教関連変数に対して因子分析を行い，台湾における宗教的態度・観念が 5 つの因子から構成されることを明らかにした（瞿 1999：10–27，2012）。1 つ目は「神鬼観念」である。玉皇上帝などの各種神格への信仰，およびそうした神格が構成するパンテオン（天国や地獄）や神格が定めた運命を信じることである。2 つ目は「霊魂観念」である。死者の霊魂や亡者の存在，憑依現象などを信じることである。3 つ目は「因果観念」である。生まれ変わりを繰り返すこと，および現世での行いが来世に影響を与えることを信じることである。4 つ目は「縁起観念」である。これは「因果観念」とも似ているが，人との出会い（配偶者や友人）がすでに前世で決められていることを信じることである。5 つ目は「気功観念」である。人間には気というものがあること，鍛錬で気を強めることができること，気で病気を治せることなどを信じることである。なお私的実践と信念・経験の次元はある程度の相関が想定される。だが，気功の実践と「気功観念」の間には有意な相関が見られないなど（瞿 2012：268），必ずしも相関が高いわけではないため，両者を別の次元として取り上げる。

結果の次元については「宗教が人生の指針や方向性を与えてくれるものであるか」といった，回答者にとっての宗教の意味の効果を検討する（瞿 1999：16）[(5)]。

宗教性とボランティア活動参加を関連付ける要因として，利他主義についても検討しなければならない。宗教性が思いやりや慈悲心などの利他主義と正の関係にあることが先行研究で指摘されている（朱・周 2012）。そのため仮に宗教性の高い回答者がボランティア活動に参加する傾向があるという結

果が得られた場合，その関係が利他主義によって説明できるかどうかを検討する必要がある（三谷 2014：13）。

なお台湾を含む東アジアでは，教団とかかわらない人々が様々な拡散的宗教性をもつ場合が少なくない。たとえば教団所属者が少なくかつ教団所属を前提としない宗教性が相対的に活発な日本を対象に，宗教性とボランティア活動の関係を分析したところ，教団所属者を含むサンプルと含まないサンプルで両者の関連に違いが見られると報告している（三谷 2014；Sakurai and Terazawa 2012）。後述するように教団所属が 10 数％である一方，各種宗教性の高い台湾においても非教団所属者の分析は重要である。本稿でも上述した教団の所属者を含めた全体サンプルと，教団所属者を除外したサンプルの両方の分析を行う。

3　データ・変数・分析方法

3-1　データの概要

データは，2004 年に実施された「台湾社会変遷基本調査」第 4 期 5 次調査調査票 II「宗教文化モジュール」（TSCS-2004（II））である。「台湾社会変遷基本調査」は中央研究院社会学研究所が中華民国行政院国家科学委員会の支援のもと台湾で毎年実施されているサンプリング調査である（第 3 期第 1 次調査以前の調査主体は中央研究院民族学研究所）。TSCS-2004（II）の調査対象は，層化三段抽出法によって抽出された，台湾全土の 18 歳以上の男女である。TSCS-2004（II）の対象者は 3955 人，有効回収数は 1881 人，有効回収率は 47.6％である（章・傅編 2005：1-36）。

台湾における宗教性とボランティア活動の関連を分析可能なデータとして TSCS-2004（II）には大きなメリットがある。 1）調査対象地が全体であり，調査対象者の年齢も幅広い， 2）比較的新しいデータである， 3）宗教性に関する設問が豊富である， 3）宗教関連の設問とボランティア活動への参加状況の両方の設問が含まれている，などが挙げられる。ただし，後述するように TSCS-2004（II）は，宗教性関連の設問が豊富な一方，ボランティアに

関する設問はごく限られている。それでも，TSCS-2004（II）を使うことによるメリットの方が大きい。

二次データの変数が限られている場合，より詳細な変数を含んだ一次データを新たに作成するのが理想的であろう。しかしながら，本稿で使用するような規模と精度をそなえたサンプリングデータを取得するのは，調査に要する労力と資金という面において，明らかに一研究者の能力の範囲を超えている(特に台湾という海外の社会を対象とした場合)。もちろん，二次データには，研究課題に合致した変数が全て含まれているとは限らない。特にボランティア活動に関する設問が限られていることは，ボランティア研究などにおいては致命的な限界にうつるかもしれない。しかしながら，変数が荒いというただそれだけの理由で二次データや二次分析の価値を全否定してしまうよりは，むしろ，限られたデータであることを認識しつつ，その限られた範囲の中で少しでも新しい知見を生みだしていくことの方が学問的意義ははるかに大きく，建設的な議論が可能になる。したがって，二次分析は理想的ではないにしても，現時点では最も妥当な方法であると推察される。こうした二次分析のメリットは，二次データを用いた計量社会学者の間では共通した理解を得られている（佐藤・他編 2000；佐藤・間淵 2002)。

3-2　変数

3-2-1　従属変数

従属変数は「ボランティア活動量」である。TSCS-2004（II）では，まず「あなたは現在ボランティア活動を行っていますか？」と尋ねて「行っている」「行っていない」の 2 択で回答を求めている。次に「行っている」と回答した対象者には，サブクエスチョンとして「週におおよそ何時間くらい行っていますか？」と尋ねている。本稿では，ボランティア活動を行っていない人には 0 を割り当てて「ボランティア活動量」とし，従属変数とする。

なお，本データの設問ではボランティア活動の有無を尋ねたのみのため，活動内容の内訳が不明である。そこで傍証として 2005 年実施の世界価値観調査台湾データのボランタリー組織における積極的活動に関する設問を確認し

てみた（http://www.worldvaluessurvey.org/WVSContents.jsp，2015 年 3 月 18 日取得）。積極的に活動をしているボランタリー組織として，スポーツ団体が約 9 %，慈善団体が約 5 %，文化団体が約 4 %，環境団体が約 2 %，消費者団体が約.6%だった（複数回答）。本データとは設問が異なるため厳密な比較はできないが，ボランティア活動の内訳は，おおよそは慈善活動，スポーツ，文化活動に関するものと推察される。

3-2-2　独立変数

公的宗教性をとらえるために，教団所属と宗教施設への参加頻度を用いた。教団所属はまず「四大仏教」である。これは仏光山，法鼓山，中台禅寺，慈済会という 4 つの仏教団体との関わりについて「どれか 1 つでも所属している＝ 1，どれも所属していない＝ 0 」とする変数である。次にキリスト教と一貫道を取り上げる。これはキリスト教，一貫道について「信仰する宗教として回答している＝ 1 」「回答していない＝ 0 」としたものである(6)。「宗教施設参加頻度」は，「あなたは現在，寺廟や神壇，教会にどのくらい行っていますか？」という設問に対する回答「 1 ：毎日」「 2 ：週に 2 回以上」「 3 ：週に一回」「 4 ：隔週で一回」「 5 ：月に一回」「 6 ：年に数回」「 7 ：ほとんど行かない」「 8 ：まったく行かない」である（ 8 が「毎日」， 1 が「ほとんど行かない」とになるように値を反転）

台湾における私的な宗教実践として「神・祖先崇拝」「座禅」「念仏」「持咒」(7)「気功」「読経」「感謝」という 7 つの実践の効果を検討する（全て「行っている」「行っていない」の二値変数）。ただし 7 つの実践をそのまま投入すると分析結果が複雑になるとともに，それぞれの相関も相対的に高い。そこで変数を縮約するために 7 つの実践に対してカテゴリカル主成分分析を行った（テトラコリック相関係数を算出しプロマックス回転法を使用した）。その結果，2 つの主成分が抽出された（固有値は第 1 主成分が 3.568，第 2 主成分が 1.422，第 3 主成分以下は 1 未満）。

第 1 主成分は，「座禅」「念仏」「持咒」「気功」「読経」から構成される（主成分負荷量はそれぞれ .406，.458，.466，.358，.448。寄与率は 51.1%）。これ

らは慣習的に行うというよりは何らかの宗教的な目的があって行われる場合が少なくないと思われる。そのためこの主成分を「非慣習的実践」と名付ける。第2主成分は「神•祖先崇拝」「感謝」から構成される（主成分負荷量はそれぞれ .745 と .564。寄与率は 20.3%）。「神•祖先崇拝」については家の神棚や年中行事などで慣習的に行うものであり「感謝」も各種祈願が成就した際も含め日常的に行うものである。そこで「慣習的実践」と名付ける。

「信念•経験」の指標には，上述した瞿の研究（瞿 1999：10-27，2012）に従って「神鬼観念」「霊魂観念」「因果観念」「縁起観念」「気功観念」の5つを使用した。なおこの4つに関する項目の選択肢はいずれも「1：とてもそう思う」「2：そう思う」「3：そう思わない」「4：まったくそう思わない」である。そしていずれも4が「とてもそう思う」，1が「全くそう思わない」となるように値を反転させている。

「神鬼観念」は「宇宙には唯一の最高神が存在する」「天国と地獄は必ず存在する」「総統になれるかどうかは運命で決まっている」の3項目を単純合算した（Cronbach alpha＝.665）。「霊魂観念」は「死後も人の魂は存在する」「祀られない魂はこの世をさまよう」「憑依現象は存在する」の3項目を単純合算した（Cronbach alpha＝.796）。「因果観念」は「輪廻転生を信じる」「善行と悪行は子孫の幸福に影響する」「善行と悪行はその人のその後の人生に影響する」の3項目を単純合算した（Cronbach alpha＝.755）。「縁起観念」は「誰と出会い，誰と一緒になるかは前世で決められている」「悪い相手と結婚するのは前世の報いである」の2項目を単純合算した（Cronbach alpha＝.808）。「気功観念」は「気功で病気を治せる」「人の『気』は鍛錬で強くできる」「『気』がとても強ければ，何物もその人を害することはできない」「『気』が強い所では草木が良く育ち，その土地は繁栄する」の4項目を単純合算した（Cronbach alpha＝.801）。

結果の次元は「宗教の意義」という変数とし「宗教は困った時に解決策を与えてくれる」「宗教は将来起こりうる禍を避けてくれる」「宗教は霊的・精神的安寧をもたらしてくれる」「宗教は日常生活上の考えや行動に影響を与える」「宗教は人生の方向性を与えてくれる」の5項目を単純合算した。選択肢

は「4：まったくそう思わない」～「1：とてもそう思う」の4件法だが無回答がすべての項目で20%近くを占めていた。そのため無回答を中間回答として代入した5件法とした上で5が「とてもそう思う」となるように値を反転し単純合算した(Cronbach alpha＝.823)。なお5件法の設問における中間回答と無回答は，どちらも回答者の属性が似ており，ある程度は同じものを測定していると指摘され，実際に中間回答として代入することが行われている(瞿 1999：14-15)。

「利他主義」は，「人は他の人々のあらゆることについて思いやりをもたなければならない」という項目に対する回答「1：とてもそう思う」「2：そう思う」「3：そう思わない」「4：全くそう思わない」である（4が「とてもそう思う」，1が「全くそう思わない」となるように値を反転)。台湾の場合，この設問のような「あらゆること」という無条件の利他主義ではなく，自分の経済的，能力的余力が備わった上で援助行動を行うべきであるといった条件づけの利他主義が少なくない（朱・周 2012：77-78)。TSCS-2004（II）でも，「人助けをする前にまず自分の能力を省みなければならない」という設問に(上記設問と同じ4件尺度)，約73%が「とてもそう思う」と答えている(上記設問の場合は約40%)（章・傅編 2005：242-245)。尺度の面でも回答の分布の面でも，無条件の利他性を尋ねた場合，台湾ではより適切に利他主義を測定できると推察される。

3-3　統制変数

各宗教性とボランティア活動の関係は，様々な社会―人口学的要因を統制した上で判断しなければならない。そこで統制変数として以下のものを使用する。「年齢2乗」「年齢」「女性」(女性＝1，男性＝0)「族群」[8]（客家本省人＝1，外省人＝1，原住民＝1，閩南系本省人＝0)「既婚」(既婚＝0，それ以外＝0)「教育年数」(「なし」＝0，「自学」＝0，「小学校」＝6，「國(初)中」＝9，「初職」＝9，「高校」＝12，「高職」＝12，「士官學校」＝14，「五專」＝14，「二・三專／軍警校專修班」＝14，「軍警官學校」＝16，「二技・四技」＝16，「大学」＝16，「大学院以上」＝18)，「就労状況」(経営者＝1，家族従業員＝1，

自営業＝1，無業＝1，被雇用者＝0），「台北高雄二大都市」（台北市・高雄市在住＝0，それ以外＝0），「本人月収（対数）」（選択肢に以下の数値を割り当てたうえで1を加算して対数化した。「無収入」＝0，「10000元以下」＝5000，「200000台湾元以上」＝200000とし，その他の回答は，たとえば「10001元～20000元以下」＝15000というように中央値を代入した）。

分析に使用した変数の基本統計量は表2にまとめてある。

分析方法は，従属変数である「ボランティア活動量」について約90％の回

表2　変数の基本統計量

	範囲	全体（N＝1357）		非教団所属者（N＝1108）	
		平均値／%	標準偏差	平均値／%	標準偏差
ボランティア活動実施者	0-1	9.4%		6.4%	
ボランティア活動量	0-25	.385	1.748	.222	1.288
四大仏教	0-1	12.7%			
キリスト教・一貫道	0-1	5.7%			
宗教施設参加頻度	1-8	3.155	1.635	3.021	1.568
非慣習的実践	－.777-1.232	.147	.304	.104	.245
慣習的実践	0-2.170	.614	.325	.639	.278
鬼神観念	3-12	8.086	2.096	7.899	2.067
霊魂観念	3-12	8.382	2.160	8.325	2.178
因果観念	3-12	9.539	2.051	9.491	2.038
縁起観念	2-8	5.391	1.674	5.370	1.648
気功観念	4-16	11.007	2.717	10.936	2.697
宗教の意義	5-25	18.092	3.971	17.645	3.861
利他主義	1-4	3.288	.672	3.268	.674
年齢2乗	324-8281	1948.465	1548.721	40.272	16.558
年齢	18-91	40.944	16.500	1895.710	1543.894
女性	0-1	46.1%		43.2%	
族群（閩南系本省人＝ref）	0-1	75.2%		77.8%	
客家系本省人	0-1	11.7%		11.8%	
外省人	0-1	11.7%		10.2%	
原住民	0-1	.1%		.2%	
台北・高雄二大都市	0-1	20.2%		19.1%	
教育年数	0-18	11.301	4.404	11.243	4.460
既婚	0-1	62.4%		60.6%	
就労地位（被雇用者＝ref）	0-1	54.5%		55.1%	
経営者	0-1	5.1%		5.1%	
家族従業員	0-1	4.4%		4.2%	
自営業者	0-1	10.5%		10.9%	
無業	0-1	24.8%		24.7%	
本人月収（対数変換前）	0-200000	24347.830	25799.140	24277.980	25762.490

答者が「行っていない」と回答しているため（表２），トービット回帰分析を使用する。分析では３つのモデルを設定する。まずモデル１では統制変数に加えて集合的宗教性に関する独立変数を投入する。次にモデル２ではモデル１に拡散的宗教性に関する独立変数を投入する。最後にモデル３ではモデル２に「利他主義」を投入する。なお上述した通り，これらの分析は全体サンプルと非教団所属者サンプルの両方に対して行う（非教団所属者サンプルのでは「四大仏教」「キリスト教・一貫道」を除外する。分析には Stata 10 を使用する。

4　分析結果

トービット回帰分析の結果をまとめたのが表３である。

まず全体サンプルの分析結果を確認する。モデル１では「四大仏教」「キリスト教・一貫道」「宗教施設参加頻度」に正の有意な関連が確認された。これは何らかの四大仏教に所属している回答者，キリスト教や一貫道の信者，宗教施設を訪れる頻度の高い回答者のボランティア活動量が多いことを示している。モデル２は「非慣習的実践」に正の有意な関連が確認された。一方，「慣習的実践」「鬼神観念」「霊魂観念」「因果観念」「縁起観念」「気功観念」「宗教の意義」には有意な関連がなかった。気功や読経，念仏などの宗教実践を行う回答者はボランティア活動量が多いことを示している。またモデル２では集合的宗教性の各変数の関連度は若干弱まるものの，依然として正に有意である。以上の結果からは台湾の全体サンプルにおいては，集合的宗教性と拡散的宗教性の一部の両方がボランティア活動量と正に関連している。モデル３での「利他主義」は有意ではない。そしてモデル２で有意だった独立変数も依然有意であり関連性も大きく変化していないため，モデル２で有意だった宗教変数には利他主義には還元できない独自の関連がある可能性を示している。

次に，非教団所属者に前提したサンプルを確認する。モデル１～３のいずれも全体サンプルのモデル１～３とほぼ同じ結果である（「宗教施設参加頻

表 3　トービット回帰分析の結果

	全体 (N=1357, 非打切りデータ=127)			非教団所属者 (N=1108, 非打切りデータ=71)		
	モデル 1 A	モデル 2 A	モデル 3 A	モデル 1 B	モデル 2 B	モデル 3 B
四大仏教	5.614＊＊＊	5.104＊＊＊	5.168＊＊＊			
キリスト教・一貫道	3.269＊＊	3.815＊＊	3.720＊＊			
宗教施設参加頻度	1.165＊＊＊	1.120＊＊＊	1.128＊＊＊	1.265＊＊＊	1.087＊＊＊	1.101＊＊＊
非慣習的実践		2.840＊	2.803＊＊		4.021＊＊	4.058＊＊
慣習籍実践		−.344	−.313		1.799	1.657
鬼神観念		−.406	−.399		−.284	−.265
霊魂観念		−.041	−.035		.094	.101
因果観念		.430	.302		.448	.371
縁起観念		−.223	−.231		−.271	−.280
気功観念		.315	.311		.169	.161
宗教の意義		−.064	−.074		−.226	−.234
利他主義			.555			.812
年齢 2 乗	.631＊＊	−.006＊＊	−.006＊＊	−.004	−.004	−.004
年齢	−.006＊＊	.561＊＊	.561＊＊	.476＊	.405	.398＊
女性	1.678	1.441	1.463	1.707	1.273	1.281
族群 (閩南系本省人=ref)						
客家系本省人	.324	.419	.376	1.044	.897	.830
外省人	−.624	−1.084	−1.091	−.978	−1.210	−1.238
原住民	−41.057	−39.092	−39.000	−36.854	−34.140	−34.114
台北・高雄二大都市	−2.076	−2.076	−2.087	−2.078	−1.981	−1.986
教育年数	.237	.159	.155	.233	.158	.149
既婚	1.061	1.202	1.242	1.664	1.900	1.968
就労地位 (被雇用者=ref)						
経営者	2.721	2.475	2.438	2.133	1.977	1.889
家族従業員	−1.213	−.605	−.495	−2.509	−1.839	−1.613
自営業者	.973	1.099	1.062	−1.576	−1.607	−1.593
無業	−.552	−.342	−.305	−.470	−.067	.013
本人月収 (対数)	.021	.034	.034	.087	.109	.109
Nagelkerke R^2	.133＊＊＊	.148＊＊＊	.149＊＊＊	.088＊＊＊	.113＊＊＊	.114＊＊＊

注：＊＊＊p<.001　＊＊p<.01　＊p<.05

度」「非慣習的実践」が正に有意，「利他主義」は有意でない)。このことは非教団所属者においても集合的宗教性と拡散的宗教性の一部の両方がボランティア活動と正の有意な関連をもっていることを示唆する。なお，全体サンプルに比べて非教団所属者は「非慣習的実践」の関連度が若干高い傾向にある。

統制変数については，全体サンプルでは，若年層と高齢層でボランティア活動量が少なく中高年層でボランティア活動量が多いという曲線関係がある。モデル 2 A とモデル 3 A ではともに「年齢」の係数が .561 と同じだが，

小数点 4 桁まで見るとそれぞれ .5613 と .5606 であり，「利他主義」を入れることで「年齢」の関連が若干弱まっている（「年齢 2 乗」も同様の傾向にある）。非教団所属者では「年齢」が一部のモデルで有意であり，変則的な結果である。

5　要約と議論

本稿は「現代台湾において，多面的な宗教性とボランティア活動の関連性はどのようなものなのか」を TSCS-2004（II）を用いて検討した。分析の結果，台湾では，集合的宗教性（四大仏教などの教団への所属と宗教施設参加頻度）と拡散的宗教性の一部（座禅や念仏などの非慣習的実践）の両方がボランティア活動量の多さと有意に関連していた。この結果は，教団所属者を含めた全体サンプルおよび非教団所属者サンプルの両方で得られた。またこれらの宗教性はボランティア活動に対して利他主義や社会―人口学的要因に還元できない独自の関連をもつことも明らかになった。以下，議論を行う。

第 1 に台湾でボランティア活動が拡散的宗教性（念仏，読経などの非慣習的実践）と関連をもつという点である。これは私的な祈りが直接的にボランティア活動を促すという欧米諸国の知見と同様の傾向を示す知見である（Loveland et al. 2005；Reitsma et al. 2006；寺沢 2012b；Van Tienen et al. 2011）。また仏壇や神棚の前での祈りが直接的にボランティア活動を促すという日本の知見とも沿うものである（三谷 2014）。

私的実践のうちの非慣習的実践の次元がボランティア活動と関連する点については，「非慣習的実践」の内容がやや多様で一概には解釈できない面もある。そこで「非慣習的実践」の構成要素である「座禅」「念仏」「持咒」「気功」「読経」それぞれの実践の有無とボランティア活動の有無のクロス表を確認してみた。全体サンプル・非教団所属者サンプルともに，いずれの実践者もボランティア活動を行う有意な傾向にあるが，「座禅」「念仏」「読経」の方が「持咒」「気功」よりその関連度が強かった（Cramer'sV は前者 3 つが約 .150，後者 2 つが約 .060）。前者 3 つは仏教色，後者 2 つは道教色の強い実践であ

り，それらを通じて周囲の人々や広く人間一般の幸福を願い，他者へ共感的志向性が生まれる可能性が示唆される。ただし読経を通じて仏教経典に書かれた利他的教説（慈悲や菩提心）などを内面化するなど，仏教的実践の方が，道教的実践よりも他者への共感的志向性と結びつき，ボランティア活動への参加を促しやすいのかもしれない。なお神や祖先を崇拝する，日々感謝をするという慣習として行われる実践はボランティア活動と有意に関連していない。むしろ何らかの目的をもって行われる私的実践がボランティア活動に結びつくようである。

なお日本では信念・経験の次元である「加護観念」がボランティア活動を促すという結果だったが（三谷 2014），本稿では信念・経験および結果の次元のいずれも有意な関連は見られなかった。信念や経験などの心理的要因よりも，実践という行動的要因がボランティアと関連するのが台湾の特徴かもしれない。

第 2 に台湾では全体サンプルのみならず，非教団所属者でも「宗教施設参加頻度」に正の有意な関連が見いだされたことが注目される。日本人全体では参拝に直接的な効果が確認された一方，非教団所属者では参拝に有意な関連が見られなかった日本の知見（三谷 2014）とは異なる分析結果である。

ではなぜ台湾では非教団所属者においても「宗教施設参加頻度」がボランティア活動と結びつくのか。まず非教団所属者の参加頻度を見ると，約 70％が年に数回以下の参加頻度だった（日本は約 83％（三谷 2014：13））。こうした参加には，各種年中行事（中元節など）や祈願などの慣習的参加も含まれると思われる。日本も同様であり非教団所属者の中でボランティア活動を行う人は，あまり宗教施設に行っておらず，また寺社や教会がボランティア活動の場や活動の機会を提供する場になっていない可能性がある（三谷 2014：14）。

しかし台湾の場合，特に村落の寺廟は信仰と直接関わらない重要な機能の１つとして，村民への福利厚生機能をもつといわれる。村落の寺廟には集会所や公民館，図書館や託児所，幼稚園が設置され，寺廟で農業用水の利用などの会議が開かれ，老人クラブなども置かれる場合がある。村落の寺廟は宗

教面を超えて社交面や娯楽面で村民のニーズに応じ，住民の福利厚生に欠かせない空間になっていることが報告されている（石田 1985；上水流 2005）。台北でも公益事業，社会教化事業，文化事業などの慈善事業を行い，その対象を近隣住民ではなく台北市民まで拡大している寺廟が複数存在する（上水流 2005：150-160）。

これらのことから台湾の寺廟は宗教施設としての側面とともに社会事業施設としての側面も大きいと推察される。仮に非教団所属者が年に数回以下の参加頻度だったとしても，訪れた際には宗教行事への慣習的参加ではなく（あるいは慣習的参加に加えて），寺廟で各種社会事業に参加したり，ボランティアを行う可能性があることを示している。

第 3 にボランティア活動参加と関連していた「宗教施設参加頻度」「非慣習的実践」はそれぞれどのような社会的属性の人々に特徴的なのだろうか。補足としてそれぞれの宗教性の規定要因を重回帰分析で検討してみた（表 4 ）。

結果は必ずしも明瞭ではないが，大まかな特徴としては「宗教施設参加頻

表 4　「宗教施設参加頻度」「非慣習的実践」の重回帰分析（補足分析）

	宗教施設参加頻度		非慣習的実践	
	全体	非教団所属者	全体	非教団所属者
年齢	.059	.009	.201＊＊＊	.104＊
女性	.032	.008	.147＊＊＊	.121＊＊＊
族群（閩南系本省人＝ref）				
客家系本省人	－.020	－.040	.001	.023
外省人	－.088＊＊	－.108＊＊＊	.019	.035
原住民	.002	.004	－.010	－.008
台北・高雄二大都市	－.039	－.028	－.006	.002
教育年数	－.107＊＊	－.155＊＊＊	.128＊＊＊	.052
既婚	.074＊	.091＊＊	－.044	－.058
就労地位（被雇用者＝ref）				
経営者	.028	.027	.068＊＊	.077
家族従業員	.029	.048＊＊	－.078＊＊	－.063
自営業者	.040	.074	－.045	－.033
無業	.081＊	.052	－.014	－.016
本人月収（対数）	.061	.020	.027	.015
R^2	.056＊＊＊	.075＊＊＊	.050＊＊＊	.031＊＊

注：＊＊＊p＜.001　＊＊p＜.01　＊p＜.05　N（全体）＝1357　N（非教団所属者）＝1113

度」は閩南系本省人，低学歴者，既婚者，家族従業員，無業者で高い傾向にあり，「非慣習的実践」は高齢者，女性，高学歴者，経営者，雇用者で高い傾向がある。各宗教性の高低は社会層で若干異なる様子が見受けられる。台湾のボランティア活動は「宗教性を媒介として階層化されている」可能性が考えられる。

本稿の限界と課題は以下の通りである。第1に TSCS-2004（II）はクロスセクションデータのため因果関係そのものを検証することはできない。今後はパネルデータが必要とされる。第2に台湾における拡散的宗教性は本稿で取り上げたもののみではない。たとえば風水や占いなどの呪術行為やケーブルテレビで放映されている宗教チャンネルを見ることなども，台湾の宗教性の少なからぬ部分を占めているだろう（瞿 1999：1-5；朱・周 2012：82）。これらの宗教性がどうボランティア活動に結びつく。今後は要検討である。第3にボランティア活動に関する設問が少ないことが挙げられる。一口にボランティア活動といっても政治活動から文化活動までその活動領域は広いため，今後ボランティア活動の詳細が分かるデータが公開された際には，活動領域ごとに宗教性との関連を再確認する必要がある。第4に各種宗教性を規定する要因―宗教性ボランティア活動間のメカニズムを分析できていない。先の補足分析では「宗教施設参加頻度」と「非慣習的実践」の社会―人口学的規定要因が若干異なることを示した。宗教性の規定要因の分析は本稿の主眼ではないが，今後は台湾における宗教性の規定要因について詳細な分析を行う必要がある。同時に寺廟を訪れる人々へのインタビュー調査やフィールドワーク，読経や座禅の指導者や指南書の内容分析，実践者の価値観のインタビュー調査などでより詳細な関連を検討する必要がある。

このような限界を抱えつつも本稿には以下の意義がある。第1に拡散的宗教性の一局面が台湾でもボランティア活動と関連していることを示した。これは日本の知見とも共通するものであり，拡散的宗教が大きな部分を占める日本・台湾に共通する関連パターンと思われる。第2に非教団所属者においては拡散型宗教と同時に寺廟を訪れる頻度がボランティア活動量の多さと関連していることを明らかにした。これは教団所属者においては参拝頻度に有

意な関連が見られなかった日本と異なる結果である。台湾は非教団所属者にとっても寺廟がボランティア活動を促す重要な場所である社会である可能性を示唆する。第 3 に「問題設定」で指摘したように，台湾における宗教とボランティアに関する先行研究は慈済会を中心とする四大仏教に焦点を当ててきた。だが本稿では四大仏教所属を統制しても，寺廟に行く頻度や非慣習的実践がボランティア活動と有意に関連していたと同時に，四大仏教所属者を除いても依然同じ結果だった。もちろん四大仏教の影響力は看過できないが，今後は寺廟や私的宗教実践の機能についても実証研究を蓄積していく必要性を本稿は示唆している。

付記

本稿は「台湾社会変遷基本調査」第 4 期第 5 次調査データを使用した。中央研究院社会学究所であり（第 3 期第 1 次調査以前は中央研究院民族学研究所），中華民国行政院国家科学委員会の支援を受けている。

本研究は中央研究院社会学研究所訪問学人として行った在外研究（2012 年 7 月 23 日～ 9 月 23 日）の一部に基づく。在外研究に際しては北海道大学大学院文学研究科「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の経費支援を受けた。

日本学術振興会科学研究費（若手研究Ｂ）「台湾における宗教と利他主義に関する社会学的研究」（研究代表者：寺沢重法），同（基盤研究Ｂ）「東アジアにおける宗教多元化と宗教政策の比較社会学的研究」（研究代表者：櫻井義秀）の一貫の研究である。

本稿は Terazawa, Shigenori (2013) “Multidimentional Religiosity and Volunteering in Taiwan” The 32nd Congerence International Society for the Sociology of Religion, University of Turku, Turku-Abo, Finland, 28 June (Oral Presenttation) の一部に基づく。執筆に際しては，Jayeel Serrano Carnelio 氏（Ateneo de Manila University）および柯群英氏（香港大学）の助言をいただいた。

注

⑴　三谷は大村の研究（大村 1996：182）を引用し，「拡散的宗教性」を「集合的宗教性に少なからず影響を受けつつ，共同体の中で文化的に共有された意識として浸透・遍在するもの」（三谷 2014：5）と説明している。

⑵ ある地域の宗教性を呼び示す場合，たとえば「日本人の宗教性」と表現することがある。しかし本稿では「台湾人の宗教性」とは言わない。第 1 に台湾では「自分は台湾人か中国人か」というナショナルアイデンティティーに関する問題があり，時にそれは台中関係とも関連する。第 2 に「台湾人」という呼称は「閩南系本省人」を意味する限定的ニュアンスがややあり，そこから外れた「客家系本省人」や「原住民」が「台湾人」という呼称に違和感をもつ場合がある（エスニシティーの詳細は注⑺を参照）。そこで本稿では「台湾における宗教性」という表現を使用する。

⑶ 各地域の宗教状況や社会状況はある程度似ているというだけで決して同じではない。また設問も同じではない。そのため厳密な意味での比較は難しいが，それぞれの地域での知見を大まかに対比させることには意味があろう。

⑷「寺」が仏教寺院，「廟」は道教寺院（道観）に相当する。台湾ではまとめて「寺廟」と称するのが一般的である。台湾には約 17000 強の寺廟・教会があり，その内 70％は道教色が強く，15％は仏教色が強い寺廟とされる（上水流 2005：130）。

⑸ 近年は華人の民間信仰を類型化する試みも行われている。たとえば Yang and Hu（2012）は華人の民間信仰を 1 ）共同体的民間信仰（祖先供養および媽祖や観音に対する参拝など） 2 ）セクト的民間信仰所属（一貫道などへの所属） 3 ）個人的民間信仰（占いなど）に分類している。興味深い分類だが，それぞれ三谷（2014）の公的実践の一部と指摘実践の次元に包括されている，寺廟参拝や信念や経験の次元などが含まれていない。したがって本稿では台湾における宗教性をより多面的に捉えられる三谷（2014）の類型を採択する。

⑹ キリスト教と一貫道をひとまとめにするのではなく，カトリック，プロテスタント，一貫道というようにカテゴリーを細分化するのも可能である。しかしそれぞれのケース数が極めて少なく（10〜30 ケース），実際に 3 つに分けて分析したところ不安定な分析結果になった。そこで本稿では便宜的に 1 つにまとめたカテゴリーの分析結果を提示することにした。「四大仏教」も同様である。

⑺ 呪文や陀羅尼などを唱えること。

⑻「族群」とは台湾におけるエスニックグループのことである。「閩南（福佬）系本省人」は，日本統治時代以前に福建省南部から台湾に移住し，もともと閩南語（福佬語）を話していた漢人の子孫である。「客家系本省人」は日本統治時代以前に福建省や広東省から台湾に移住し，もともと客家語を話していた漢人の子孫である。この 2 つの族群は本省

人と一括して呼ばれる。一方，「外省人」は蒋介石政権による台湾接収後に中国大陸各地から台湾に移住した人々とその子孫である。「原住民」は漢人の台湾移住以前から台湾に居住していたオーストロネシア系言語を母語とする人々の子孫である（アミ族，タイヤル族など）。これら 4 つの族群は「四大族群」と呼ばれる。なお「原住民」という言葉は日本では時に侮辱的なニュアンスを伴うため「先住民」を用いるのが一般的である。だが台湾では「先住民」の方が侮辱的であり「原住民」の方が望ましいとして一般的に使われる。本稿も「原住民」を使用する（沼崎 2014：8–10）。

参考文献

〈英語・日本語〉

藤野陽平(2008)「台湾キリスト教の歴史的展開 ── プロテスタント教会を中心に ──」『哲学』119：295–336。

Hsiao, Hsin-Huang M. and David Schak (2005) “Socio-Cultural Engagements of Taiwan’s New Buddhist Groups,” *China Perspectives* 59: 43–55.

石田浩（1985）『台湾漢人村落の社会経済構造』関西大学出版部。

上水流久彦（2005）『台湾漢民族のネットワーク構造の原理 ── 台湾の都市人類学的研究 ──』渓水社。

Loveland, Mattew T., David Sikkink, Daniel J. Myers and Benjamin Radcliff (2005) “Private Prayer and Civic Involvement,” *Journal for the Scientific Study of Religion* 44(1): 1–14.

Liu, Eric Y., Harold G. Koenig and Dedon Wei (2011) “Discovering a Blissful Island: Religious Involvement and Happiness in Taiwan,” *Sociology of Relgion* 73(1): 46–68.

Lu, Yung-Feng (2008) *The Transformation of Yiguan Dao in Taiwan: Adapting to a Changing Religious Economy*, Lexington Books.

Madsen, Richard (2007) *Democracy’s Darma: Religious Renaissance and Political Development in Taiwan*, University of California Press.

三谷はるよ(2014)「日本人の宗教性とボランティア行動 ── 非教団所属者における拡散的宗教性の影響 ──」『ソシオロジ』179：3–18。

沼崎一郎（2014）『台湾社会の形成と変容 ── 二元・二層構造から多元・多層構造へ ──』東北大学出版会。

大村英昭（1996）「宗教社会学の現状と課題 ── プロ宗教の終焉 ──」井上俊編『岩波講座現代社会学 7 〈聖なるもの／呪われたもの〉の社会学』岩波書店：179–201。

Reitsma, Jan, Peer Scheepers, and Manfred T. Grotenhuis (2006) “Dimensions of Individual Religisosity and Charity: Cross-National Effect Difference in European

Countries?," *Review of Religious Research* 47(4): 347-362.
Sakurai, Yoshihide and Shigenori Terazawa (2012) "Is Religion Social Capital in Japan?," *Journal of the Graduate School of Letters* 7: 21-29.
佐藤博樹・池田健一・石田浩編（2000）『社会調査の公開データ ── 2 次分析への招待 ──』東京大学出版会。
佐藤博樹・間淵領吾（2002）「二次分析の新たな展開を求めて」『理論と方法』17(1)：1-2。
Stark, Rodney. and Charls. Glock (1968) *American Piety*, University of California Press.
寺沢重法（2012a）「宗教参加と社会活動」『現代社会学研究』25：55-72。
────（2012b）「アメリカにおける「宗教と社会活動」研究の動向 ── American Sociological Review, American Journal of Sociology, Journal for the Scientific Study of Religion, Review of Religious Research, Sociology of Religion のレビューを通じて ──」『宗教と社会貢献』2(1)：45-60。
────（2013）「現代日本における宗教と社会活動 ── JGSS 累積データ 2000-2002 の分析から ──」『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集』13：129-140。
Tao, Hung-Lin and Powen Yeh (2007) "Religion as Investiment: Comparing the Contributions and Volunteer Frequency among Christians, Buddhists, and Folk Religionists," *Southern Economic Journal* 73(3): 770-790.
Van Tienen, M., Peer Scheepers, Jan Reitsma and Hans Schilderman (2011) "The Role of Religiosity for Formal and Informal Volunteering in the Netherlands," *Voluntas* 22(3): 215-240.
Yang, Fenggang and Anning Hu (2012) "Mapping Chinese Folk Religion in Mainland China and Taiwan," *Journal for the Scientific Study of Religion* 51(3): 505-521.
Zhai, Jiexia E. and Robert D. Woodbery (2011) "Religion and Educational Ideals in Contemporary Taiwan," *Journal for the Scientific Study of Religion* 50(2): 307-327.
〈中国語〉
章英華・傳仰止編（2005）『台灣社會變遷基本調查計畫第四期第五次調查計畫執行報告』中央研究院社會學研究所。
瞿海源（1999）「術數流行與社會變遷」『臺灣社會學刊』22：1-45。
────（2012）「宗教與術數態度和行為的變遷（1985-2005）── 檢驗世俗化的影響 ──」朱瑞玲・瞿海源・張苙雲編『台灣的社會變遷 1985～2005 心理，價值與宗教（台灣社會變遷基本調查系列三之 2）』中央研究院社會學研究所：242-291。
朱瑞玲・周玉慧（2012）「台灣社會的慈善觀念與道德感」朱瑞玲・瞿海源・張苙雲編，『台灣的社會變遷 1985～2005 心理，價值與宗教（台灣社會變遷基本調查系列三之 2）』中央研究院社會學研究所：71-103。
丁仁傑（1999）『社會脈絡中的助人行為 ── 臺灣佛教慈濟功德會個案研究 ──』聯經出版社。